パレート『経済学提要』に対する一考察

（要旨）

東京大学大学院学際情報学府学際情報学専攻　村舘靖之

なぜパレートを読む必要があるのか？パレートの経済学に関する著作は完全な邦訳がほとんど出ていない。特に経済学上の主著である『経済学講義』および『経済学提要』はあまり日本では読まれているとはいえない。パレート効率性やパレート原理、パレート法則という言葉はよく使われるが、オリジナルな定義はあまり知られてはいない。無差別曲線分析や序数的効用、エッジワースのダイアグラムなど現代のミクロ経済分析の出発点の一つに『経済学提要』を挙げることが出来る。協調の失敗や動学的一般均衡モデルといったマクロ経済学のミクロ的基礎づけの研究の中でもパレート順位付けや動学的な資源配分の効率性の問題にパレートの経済理論は応用されている。

そこで本稿ではパレートの経済学上の主著である『経済学提要』について各章ごとの要約を行い、その内容を批判的に検討した。

本稿ではまずパレート『経済学提要』の本文をイタリア語版をもとに理論的に検討し、付録で展開される数理的なモデルに関しては仏語全集版や英訳を参照しつつ検討を行った。従来の研究ではパレートの貨幣理論や価格の硬直性に関する議論や、貨幣数量説批判などをあまり取り上げてはいない。無差別曲線や序数的効用関数に代表されるいわゆる純粋理論だけではなく、応用理論についても広く言及した。

本稿では経済理論のみならず、パレートの政治理論（エリートの周流）や社会理論（残基と派生）にも言及しつつ、『経済学提要』の内容を検討した。本稿で明らかにしたことは、パレートの理論が純粋理論（一般均衡論）のみにとどまらず、貨幣や経済危機に関する応用理論にも広がりをみせていたことであり、現代においてもパレートの著作を読み返すことで、理論的・政策的な含意を得られるのではないかということである。